別紙様式３（修士申請者用）

（西暦）2018　年度　博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名（注：学位論文題名が英語の場合は和訳をつけること）

日本語版 Work Rehabilitation Questionnaire の信頼性・妥当性の検討

学位の種類：　修士（　作業療法　学）
首都大学東京大学院
人間健康科学研究科　博士前期課程 人間健康科学専攻　作業療法科　学域
学修番号　17896608
氏　名：牧　利恵
（指導教員名：小林　隆司　教授　）

注：1ページあたり 1,000 字程度（英語の場合 300 ワード程度）で、本様式 1～2 ページ（A4 版）程度とする。

【背景と目的】

職業リハビリテーション（以下，職リハ）は「障害者に対して職業指導，職業訓練，職業紹介その他この法律に定める措置を講じ，その職業生活における自立を図ること」と定義される．作業療法士（以下，OT）は，就労支援に適した職種であるとされ（香田ら，2006），多くの OT が何らかの形で職リハに関わっている現状にある（中井ら，2015）が，作業療法の効果を示したエビデンスの蓄積は十分とはいえない．理由の 1 つに，介入の成果を示すアウトカム指標の不足が挙げられる．例えば牧ら（2018）は，文献研究を通じて本邦の OT が，就労に直結する作業場面の多くを観察によって評価している点を指摘し，特に対象者の視点に立脚したアウトカムの必要性を強調した．

海外の職リハ領域で用いられている患者立脚型アウトカムに，Work Rehabilitation Questionnaire（以下，WORQ）がある．これは，ICF Core Set for vocational rehabilitation が基盤となり，十分なユーザビリティと信頼性，妥当性が認められている．

そこで本研究の目的は，日本語版 WORQ（以下，WORQJ）を作成し，本邦の職リハ領域で使用できるよう，信頼性と妥当性の検討をすることとした．職リハ領域で幅広く使用できる評価尺度を作成することは，介入の成果をエビデンスとして蓄積することに寄与すると考えた．

【対象と方法】

研究１（翻訳と言語的妥当性の検討）

WORQJ の翻訳は，Beaton の尺度の異文化適応に準拠した．言語的妥当性の検討は，就労を考えている方を対象に，質問項目の答えやすさについて 10 分程度のインタビューをおこない，文言を修正した．

研究２（検査者内信頼性・構成概念妥当性の検討）

就労を考えている方を対象に，検査者内信頼性・構成概念妥当性の検討をおこなった．検査者内信頼性の検討は，再検査法に基づき WORQJ を 2 回実施した．分析には改変 R コマンダーを使用し，級内相関係数 ICC(1,1)を求めた．弁別的妥当性の検討は，WORQJ と SF-8 の相関を Spearman の順位相関係数で求めた．収束的妥当性の検討は，WORQJ と就労移行支援のためのチェックリスト（以下，チェックリスト）の相関を Spearman の順位相関係数で求めた．相関の強さは，Guilford（1956）の基準に従い，0.4 から 0.7 を「中等度の相関がある」，0.7 から 0.9 を「強い相関がある」とした．

構成概念妥当性の検討に使用するアウトカム指標は，弁別的証拠の収集に SF-8，収束的妥当性の収集にチェックリストとした．SF-8 は，8 つの健康概念の他，身体的健康と精神的健康のサマリースコアが算出可能である．チェックリストは，〈日常生活〉11 項目，〈働

く場での対人関係〉8 項目，〈働く場での行動・態度〉15 項目の 3 分野から構成される．

【結果】

研究 1

Beaton の方法は 6 つのステップに分かれており，それぞれのステップに準拠して翻訳を行った．翻訳された WORQJ を対象者 27 名へ実施し，終了後に質問項目の答えやすさについて 1 対 1 の個別インタビューを 10 分程度行った．インタビューで挙げられた「選択肢の『いいえ』と『当てはまらない』の違いが分かりにくい」に対しては，日本語では「いいえ」のみで回答可能なため，原著者に確認して「当てはまらない」を削除した．「『耐久力』よりも『持久力』の方が分かりやすい」に対しては，「持久力」に変更した．「1 つの質問で，現在の就労状況と現在働いていない場合を同時に聞いていて分かりづらい」に対しては，改行もしくは下線を引いて強調した．

研究 2

対象者は 41 名で，平均年齢は 39.3 歳であった．疾患は ICD-10 に準じて分類したところ，知的障害，うつ病，統合失調症などの精神および行動の障害が最も多く，次に高次脳機能障害を伴う脳血管疾患が多かった．

検査者内信頼性を示す級内相関係数は，心身機能の項目では 0.66，活動と参加の項目，合計得点では 0.71 となった．

弁別的妥当性の検討では，精神的健康を表す 5 項目に中等度から高い相関が認められた．収束的妥当性の検討では，全項目において中等度の相関がみられた．

【考察】

研究 1 では，異文化適応に準じて，原著者らとのやりとりや予備テストを実施する事で，原版と等価の WORQJ を作成できたと考えた．

検査者内信頼性の検討では，Landis の基準によると 0.61 から 0.80 を十分な信頼性があるとしており，本研究の結果から，WORQJ には十分な信頼性があると考えた．

弁別的妥当性では，精神的健康を表す 5 項目で中等度から強い相関がみられた．先行研究では，脊髄損傷患者を対象に SF-36 を実施し，低い相関が示されていた．本研究では精神疾患を持つ対象者が多く，「精神疾患を持つ人にとっての就労は QOL を向上させるための条件であり，QOL に影響を与える重要な因子である」という報告（Leman，1982）がされていることから，実施サンプルの違いが影響したと考えた．

収束的妥当性の検討では，全項目で中等度の相関がみられ，職リハ領域の評価尺度として妥当であると考えた．また，チェックリストと WORQJ は，それぞれに基盤となる概念などが異なることから，強い相関は認められなかったと考えた．このことは同時に，WORQJ の独自性を示しているとも考えられた．